第30回 祝 "川の都" かみごおり 川まつり

子どもの頃見た花火は、大きかったなあ――。
あの時の花火は川まつりの花火だったのかも知れません。
川に親しみ、語らい、汗を流し、そして夕涼みのひとと き、夜空を彩る花火を堪能する真夏の一日。
記憶の中にあるまつりの風景はそれぞれ違っていても、きっとその雰囲気は良い思い出となって残っていることでしょう。友だちと行った夜店、汗をかき踊った盆おどり、親子で見た花火。
その川まつりが、今回で30回を迎えます。この節目に、清流千種川の流れと共に歩んできた川まつりの歴史を振り返ってみましょう。

上郡の夏の風物詩として、川と共に歩んだ30余年

はじまり

川まつりは、昭和46年町民が家族そろって楽しめる花火大会を、という目的で盆おどりと併せて「千種川川祭り」として始まりました。
7月末の開催ということで、当時、台風の到来などで2回中止になっています。

昭和50年代

昭和50年には、前年が台風の影響で中止になったため「昨年の分まで盛大に行事をしよう。」と、ボーイスカウトのパレードや文化協会の協賛、商工会青年部・婦人部による上郡音頭、上郡小唄の発表が行われています。

川の恵みに感謝すると共に、川の安全を祈願する厳粛な式典も、この頃から始められました。
また、昭和50年代当時から人気のあった「カラオケのど自慢大会」が旭公園にステージを設けて行われています。
昭和59年には「町民総参加で川祭りを盛り上げよう。」と、「ゲートボール大会」「納涼茶会」などの協賛行事が多数加わり町民こぞって楽しむ祭りになってきました。

また、パレードにも各種団体が参加し、いかだコンテストやアユのつかみどりなど、川まつりならではの「川に親しむ」行事も始まり、より盛大な夏まつりとなりました。
花火も多彩は趣向が凝らされ、スターマイン、噴水、大銀滝、文字仕掛けなどが川まつり花火大会の魅力となっていました。

平成の川まつり

平成を迎え、上郡を代表する「円心太鼓」が生まれました。市中パレードには町外からの参加団体も加わりました。
元年には四国から阿波おどり、6年には岐阜県郡上八幡から郡上おどりが来町し、サンバやちんどんやも交え賑やかに踊り、パレードのゴールとなる役場前の川原では、消防団によるカラー放水がサイレンの音を合図に一斉に行われパレードを迎えました。
平成4年には川まつり20回を記念して、上郡音頭、上郡小唄を歌ったペギー葉山のコンサートを開催しています。
平成7年、阪神地域と淡路島に大きな被害をもたらした震災への配慮から、市中パレードと花火大会を中止し、夜の会場を照らす手づくりランタン約1,500個が一斉点灯されました。
平成8年からは、水の郷・上郡を代表する夏祭りとして「"川の都"かみごおり川まつり」と名称が改められ、町民が協力し合い、参加し楽しむまつりとして、この度の30回を迎えています。

特設ステージで熱く燃えた1日！
夕方の雷雨でひと波瀾!!

8月4日(日)、千種川親水広場特設ステージと役場周辺を会場に第30回〝川の都〟かみごおり川まつりが開催されました。
炎天下での式典とカブ・ボーイスカウトの鼓笛隊で幕を開けた今回の川まつりは、30回記念ステージが日中のメインイベントでした。
子どもたちに大人気の「アンパンマン」ショーからスタート。町内の保育園児の演奏、小学生の太鼓、中学生のギターとブラスバンド、上郡高校の和太鼓、迫力ある「円心太鼓」の演奏と、途切れることなく発表される日々の練習の成果に、観客からは惜しみない拍手が送られていました。

雨上がりの夜空に開く大輪の花

思わず聞き入る円心太鼓の響き

そして、午後5時45分、「天馬鈴若ロック民謡ショー」の演奏が始まったその時、雷鳴とともに黒雲が空一面を覆い、まさかの豪雨。雨よけのテントをステージ前に移動しても横殴りの風雨が観客の足元を濡らす状況の中、演奏は続きました。
30分ほど中断したものの雨雲が去った後は、昼間の暑さが嘘のように涼しくなりステージ再開。「大木こだま・ひびき」の漫才が観客を呼び戻し、「セニョール玉置」のものまねで大爆笑のうちにステージは終演となりました。
役場では納涼茶会。周辺のランタンが灯り、夜店の周辺には浴衣姿がちらほら。そして川まつり恒例の花火大会が始まり、澄み渡った夜空に約1700発のカラフルな閃光を放つ花火が打ち上げられました。

夕立ちの雨の中で歌う天馬鈴若さん

ピアニカ演奏で出演のつばき保育所

出演者の演奏を見つめる温かい眼差し